

ザンジバルでの「ものづくり」と「インフラ整備」考



巻頭言

竹村 景子*

Consideration of "Manufacturing" and "Infrastructure Development"
in Zanzibar

Key Words : Zanzibar Island, coconut, plastic, garbage problem

私は、タンザニア連合共和国のザンジバル島—イギリスのロックバンド「クイーン」のボーカルであったフレディ・マーキュリーの生誕地として有名です。スワヒリ語に関する社会言語学的調査およびスワヒリ語諸変種の記述調査を1997年から行ってきました。ザンジバル島はタンザニア本土からセスナ機で20分ほどの距離にあり、中心地は島の西側にあるザンジバルタウンです。ザンジバルタウンの中に「ストーンタウン」と呼ばれる街区があります。ここは19世紀中頃にアラビア半島のオマーン王国の王都となっていたのですが、アラブ風の建築様式の建物がひしめき合うように建てられたところで、2000年には世界文化遺産に登録されました。

ただ、私が主に調査を行っているのは島の北部に位置するチャアニという村落部で、ストーンタウンに見られるアラブ風の街並みとは全く異なる風景が広がっているところです。おそらく、多くの日本人が想像する「アフリカ」の様子が見られるのは、チャアニ村の方ではないでしょうか。

そのチャアニ村での調査を開始した今から24年前、村には電気も水道もありませんでした。ガスはそもそもタウンでも使っていませんでしたから、言うに及ばずです。煮炊きは拾い集めてきた薪を使うので、まずそれに火をつけるのが大変です。水道がないので、村の共同井戸に水を汲みに行かねばなり



ません。その頃の私は結婚もしておらず「一人前の女性」としてはみなされていなかったの、村のママたちにおんぶに抱っこ状態で、毎日の三度の食事を作っていただき、水浴びをするための水も汲んできていただき、何とも甘やかされた状態で過ごしていました。蛇口をひねれば清潔な水が出てくる、スイッチを押せば電気がつく、お湯を沸かしたいと思えばガスコンロを使えばよい、そんな生活を当たり前だと思いつくのは間違っていると気付かされた日々でした。

ただ、その生活がただただ不便で大変だとマイナスに思っていただけかということ、実はそうでもありません。様々な工夫でもって「ものを無駄にしな

* Keiko TAKEMURA

1967年7月生まれ
大阪外国語大学大学院外国語学研究所
修士 (1992年)
現在、大阪大学 大学院言語文化研究科
言語社会専攻 教授 (大阪大学外国語学
部 長) 修士 (言語文化学)
専門 / スワヒリ語学・文学・文化論
TEL : 072-730-5204
FAX : 072-730-5204
E-mail : takemura@lang.osaka-u.ac.jp





い」知恵をたくさん学びました。その中でもイチオシはココヤシの使い方です。ココヤシの実はいわずと知れたココナツです。例えば沖縄などでココナツジュースを飲んだことがあればおわかりだと思いますが、あのジュースは未熟ココナツの水分であって、完熟したココナツにはあれほどの水分はありません。ココナツが完熟になると、内殻は白い果肉でいっぱいになります。球体の内殻を半分に分けて、中の果肉を専用のおろし器で擦りおろし、それに水を混ぜて絞って作ったのがココナツミルクです。このミルクはスワヒリ料理には欠かせない重要な調味料です。

果肉を使い切った内殻はどうか。無駄にはしません。乾燥させると非常によく燃えるので着火剤になります。また、半割りにしているので、棒を通して「お玉」にすることもできます。そして、内殻を覆っていた外殻もそのまま捨てたりはしません。大きいものは低めの椅子代わりにしますし、しばらく砂浜に埋めておくと繊維がバラバラになるので、その繊維で縄を編みます。大きな葉もココヤシの特徴ですが、その葉もいろいろと使い道があります。屋根材として使っているのを見たことがある方もおられるでしょう。編み方を変えれば、家の垣根材としても使えます。また、一番大きな葉脈を抜き取って束にすれば、箒にもなります。そして、もうココナツを生み出さない老木になれば、切り倒して建築材にするのです。このように、1本の木を余すところなく使うのを見て、金属製品や工業製品を使わなくても、昔ながらの人の知恵で生活に必要な物を調達できるのだと改めて感動しました。

では、村の人びとはその生活で満足しているのかというと、それは違います。24年も付き合ってい

るので、初めて会った頃にまだ小学校にも通っていませんでした。彼らが最近の「日本からのお土産」としてリクエストするのは、スマホやタブレット、パソコンです。電気も通っていないのにどうするのか?と思われるのですが、そこはイスラームが浸透している地域であるだけに、「持てる者が持たざる者に施しをするのが当然」であって、村内でほんの少しおられる給与労働者の家にだけ通してある電気を使わせてもらって充電するのです。この24年の間にスマホ普及率はものすごく上がっており、私が3年前までずっとガラケーを使っていたら、「まだそんな電話使ってるの?」と呆れられてしまったくらいです。

日本には様々な工業製品があって、とても生活が便利であることも彼らは聞きかじっています。私が調査のために持って行く物に対する興味もものすごくあります。ボールペンやノート一つとっても、海外、近年は特に中国から入ってくる物よりも、日本製の物の方が品質がよいという認識もあります。だから、私の持っている物を欲しがることが多いし、そういう物を手に入れられないかと尋ねてくる人も多いのです。

しかし、村で生活していて最大の問題になっていると思われるのが「ゴミの処理」です。工業製品が入り込んでくる前は、ココヤシの例に代表されるように全て「土に還る物」が用いられてきました。そして、道路も舗装されていたわけではなく、土や砂の道でした。だから、路上に捨てた物はゴミにはならず、いずれ分解されていたのです。しかし、日本でも議論されているプラスチックバッグ等のプラスチック製品が海外からどんどん流入し、道路の舗装率も上がったのに、「手にある要らない物」を今まで通りポイ捨てし続けてしまった結果、道路はゴミだらけになり、村の「不要な物集積場」は土に還らない物で溢れかえるようになってしまいました。タンザニアは2019年6月にプラスチックバッグの使用・持ち込みを禁止しましたが、ゴミ問題はそれで根本的に解決できるような規模ではありません。村だけでなく、タウンもその周囲も、燃やせる物も燃やせない物も含めてゴミが溜まっていて、それが原因でコレラ等の感染症が発生し、ダイオキシンの問題もあります。

私は言語学的、文化的な調査のために村に入っているだけであって、こういった問題を解決する術を持っていません。でも、長年付き合ってきた村の人たちの生活の向上について、一緒に考えたいと常に思っています。日本はこれまでも ODA 等でかなりの額の支援をしてきたと思いますが、建物を建てたり、道路を造ったりすることだけで済ませるのでは

なく、インフラの整備、特にゴミ処理の問題について現地の人びとと議論して解決を目指すような支援ができないかと考えています。文理融合の理念のもと、理系の研究者のみなさんとこのような問題についてディスカッションできる機会があれば、と期待しています。

